

「聖霊の力を受け」

マルコ 16:19-20、使徒言行録 1:3-5

森島 牧人 牧師

今日はペンテコステ（聖霊降臨）の主日で、同時に教会の誕生日でもあります。テーマは呼び出されて行くこと、派遣されて行くことの大切さです。

宗教の宗という字は「ウ冠」と「示」から成り立っていて、「ウ冠」は家や屋根を表し、「示」は祭壇の上の生贄を清める水や酒が滴る様子を表しています。そのことから「宗」は、家や宗教的施設の中で生贄を捧げて礼拝している表現とされています。それは、外部と遮断された建物の中に閉じ籠り、信仰の在り方も閉鎖的で自分たちだけの平安を求めて安穩としているということであり、今日のテーマとは真逆ということになります。しかし、知らぬ間にそのような状態になっている私たちに、主は聖霊を送り、いるべき場所へ私たちを呼び出して派遣されるのですが・・・そこにペンテコステの真の意味と課題があります。

さて、マルコによる福音書を通して神の言葉を聞いて来ましたが、今日はその締めくくりの一つです。四つの福音書に共通しているのは、主イエスと弟子たちの働きのすべては教会の誕生に繋がるということで、それは使徒言行録へと続くことになるのです。

そして、弟子たちの食卓の場に現れ、全世界に行って全ての造られたものに福音を宣べ伝えなさいという派遣の大命令をされた主は、その後、「天に上げられ、神の右の座に着かれた。」（マルコ 16：19）と聖書にあります。「神の右手」とは神から遣わされた神の救いの右手を表していることから、「神の右の座」とは、主イエスにとって正に相応しい場所であり、地上での使命を全うされた主があるべきところへ復帰されたと言うことを示しているのです。私たちが「使徒信条」として告白している言葉の一部でもある「昇天、右の座」は、主イエスが神に属する存在であることを立証するものとして、マルコ福音書に、またここにも書かれたと思われま

す。「<神の子>イエス・キリストの福音の初め。」という言葉をもって、まさに最初の福音書は始まったのですが、しかし主が<神の子>であると理解できた者は、主の弟子を含めて誰もいませんでした。初めてそれを理解したのは、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」（同 15：34）という主の十字架上での最後の言葉を聞いた、ローマ軍の百人隊長でした。「本当に、この人は神の子だった」（同 15：39）と信仰告白をする彼は、刑を執行する側にいた<異邦人>だったのです。しかし、その後、主イエスのすべてを理解した弟子たちは、主の命令に従い、聖霊の力によって一つの群れへと形成され、伝道を開始するのです。そこから教会が生まれ、キリスト教は成立したのです。

主イエスが生涯を通して示されたこと、それは「生ける神は今もここにおられる」ということでした。つまり、人間の歴史にずっと関わって来られた神が、その愛を現わされたのが御子の十字架だったからです。そのことによって罪から救い出された私たちは、神との応答を許され、神の国、神の支配の中に自らを置くことが出来るようになったのです。その出来事こそがペンテコステであり教会の誕生日であること、そして私たちの群れが弟子たちの群れと同じように派遣されて行く民であることを、私たちは知らなければなりません。「弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを、それに伴うしるしによってはっきりとお示しになった。」（同 16：20）とあります。私たちも信仰を告白し、主を遣わしてくださった神の御前に、真実な礼拝を捧げ、福音を伝えるという新しい日々へと、聖霊の風に押されて出て行きたいと願うものです。

（説教要約 羽入田悦子）